

# 日本語ローマ字表記における 外国人への「配慮」について

—YEN・TOKIO・NIPPON—

村上 碧  
竹内 史郎

## 1. はじめに

私たちが一般的に使用するローマ字表記は、下に示す図1の通りになっている。私たちのローマ字表記は、この、1954年12月9日に示された「ローマ字のつづり方」(内閣告示第1号)を基準としている。第1表は訓令式と呼ばれ、現在のローマ字表記の基礎である。また、第2表の上5行では、修正ヘボン式の使用を認めている。そして、第2表の下4行では日本式の表記を認めている。第2表上5行の表記は標準式または、改修ヘボン式とも呼ばれるが、本稿では、修正ヘボン式と呼ぶことにする。

図1 ローマ字のつづり方(文化庁ホームページより改編)

第 1 表 ( ) は重出を示す。)

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	(i)	yu	(e)	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	(i)	(u)	(e)	(o)			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	(zi)	(zu)	de	do	(zya)	(zyu)	(zyo)
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

第 2 表

sha	shi	shu	sho
		tsu	
cha	chi	chu	cho
		fu	
ja	ji	ju	jo
di	du	dya	dya
kwa			
gwa			
			wo

「藤本」という苗字をローマ字でつづるとFujimotoが一般的であるが、Huzimoto、Hudimotoも内閣告示に当てはまっている。私たちが日常目にするローマ字表記はほぼ内閣告示に沿うものである。これに対し、内閣告示に当てはまらない表記も実際に行われることがある。例えば日本国の通貨単位である「円」のローマ字表記YENがある。内閣告示に従うならば、ENと表記されるべきだが、国の定めた内閣告示からは外れた表記となっている。また、サッポロビール株式会社の商品であるYEBISUも同じように/e/がYEと表記されており内閣告示に沿っていない。さらには、東京海上の「東京」を表すTOKIOという表記も内閣告示に当てはまらない。このような表記には、なんらかの事情があるはずである。以下、本稿は、内閣告示に従わないローマ字表記に、外国人へのある種の「配慮」がはたらいっていることを論じていく。

## 2. YEN

YENの表記が内閣告示に当てはまっていないことについて、蜂矢真郷(2006)に次のような記述がある。

日本式のローマ字綴りの基準をどれとするのがよいかやや難しいが1885(明治18)年の田中館愛橘氏「理学協会雑誌を羅馬字にて発兌するの發議及び羅馬字用法意見」によるとするならば、これには、YI・YE/WI・WEもあるので、日本式と言うことも可能だろう。(初期日本式と呼んでおく)尤も、同じく1885年の初期ヘボン式ではヘ・ヲをYE,WOと綴るので、ヘボン式も無縁ではない。

(中略)

YENやYEBISUのYEの綴りは初期日本式と見られるが、これは、右の「ローマ字のつづり方」の「第2表」に入っていない。日本銀行券に用いられている表記YENが、内閣告示で認める範囲に入っていないということになる。

(223～224頁、下線部は引用者による)

蜂矢真郷(2006)では、日本式の提唱者、田中館愛橘が明治期にYEを使用していたために、YENやYEBISUは「初期日本式」だと述べられている。

先行研究では、ヘボン式との関係が以上のように述べられているが、本稿ではここで改めて、菊池悟（2007）と高島俊男（2001）に基づきつつYEとヘボン式の関係について整理してみたい。ヘボン式はジェームス・カーティス・ヘボン（1815～1911）によって提唱された表記で、彼が著した『和英語林集成』にて詳しいところが示されている。『和英語林集成』は初版（1867）から第9版（1910）まで発刊しており、何度も改訂されている。この中でも、最も大きく表記の変化があったのが再版（1872）と第3版（1886）の間である。図2-1から見て取れるように、/e/に関して言うとYEであったのがEに変化している。ただし、図2-2のように着点を表す格助詞の「へ」や「円」に関してはYEのままである<sup>1</sup>。第3版での変化は、改定する際にヘボンと羅馬字会との協議の結果である<sup>2</sup>。つまり、表記の大きな変更は羅馬字会の方針を採用したことによるのである。以下、本稿では純粋にヘボンによって作られた再版までの表記を旧ヘボン式とする。

これに対して、日本式は、次のように言うことが出来る。1885年に「理学協会雑誌を羅馬字にて発兌するの發議及び羅馬字用法意見」を否決されたことで、田中館愛橋は羅馬字会を脱退し、田中館式を新たに提唱した。この田中館式が1886年に弟子の田中丸卓郎によって日本式と命名されることになった。日本式は五十音図における子音を統一した表記となっている。4頁の図3を参照されたい。

以上からすると次のことが言えそうである。「理学協会雑誌を羅馬字にて発兌するの發議及び羅馬字用法意見」を発表した段階では田中館愛橋は羅馬字会の会員であった。協会の意向を完全には否定せずに第3版以降の修正ヘボン式と同じようにYEなどを許容していたのだと考えることができる。蜂矢真郷（2006）では「ヘボン式と無縁ではない」と述べられているが、このYEは、田中館が羅馬

図2-1 和英語林集成（『和英語林集成 [A]～[K] 第1巻』（港の人）より）

初 版	再 版	3 版
Y <sub>h</sub> = 柄, n. A handle. <i>Kuzo no —, the handle of a hoe.</i>	Y <sub>h</sub> = 柄, n. A handle. <i>Kuzo no —, the handle of a hoe.</i>	HE = 柄 n. The placenta; i.g. em.
Y <sub>h</sub> = 繪, n. A picture, drawing. — <i>wo kaku, to draw a picture.</i> Syn. o'WA, Y <sub>h</sub> DE.	Y <sub>h</sub> = 繪, n. A picture, drawing. — <i>wo kaku, to draw a picture.</i> Syn. o'WA, Y <sub>h</sub> DE.	HE = 繪 n. Affinity; relation; i.g. en.
Y <sub>h</sub> = 河, n. A river, or an arm or inlet of the sea; a sound, frith, fiord. <i>Kori zo, a canal.</i>	Y <sub>h</sub> = 河, n. A river, an arm or inlet of the sea; a sound, frith, fiord. <i>Kori zo, a canal.</i>	E = 河 n. A handle; <i>kusa no —, the handle of a hoe.</i>
		HE = 繪 n. A picture, drawing; — <i>wo kaku, to draw a picture; — ni kaku, to picture, or draw a likeness of.</i> Syn. o'WA, Y <sub>h</sub> DE.
		E = 河 n. A river; an arm or inlet of the sea; a sound, frith, fiord; <i>hori, a canal.</i>
		HE = Used in comp. as, e-otoke, a handsome man; e-otome, a beautiful woman.

図2-2 第3版におけるYE (『和英語林集成[M] ~ [Z]第2巻』(港の人)より)

再 版	3 版
<p>Y<sub>u</sub> へ 方, post-posit. Noting motion toward or into; To, toward, in, into; sign of the dative. <i>Toku ye yuku</i>, where are you going? <i>Yedo ye itte ori</i>, going to Yedo. <i>Hon ye kakete</i>, to write in a book. <i>Chawan-awan ye tsugu</i>, pour it into a tea-cup. <i>Shita ye oriru</i>, to go down. Sometimes = by, as; <i>kami ye mo sono onomuki ga kibayo-mashita</i>, this matter was heard even by the prince. Syn. xi.</p> <p>YEN, = 円, 圓, n. The Japanese dollar.</p> <p>Yo, = 四, a. Four. Syn. shi, yotsu.</p> <p>Yo, = 餘, (amari). More than, above; other, different, besides. <i>Ni jū yo nen</i>, more than twenty men, twenty men or more. <i>San yo nen</i>, above a thousand years. — <i>no hito</i>, another person. <i>Some yo</i>, besides that, moreover. Syn. hoka, ta.</p> <p>Yo, = 節, n. The part of a bamboo between the joints. <i>Take no yo</i>, a joint of bamboo. <i>Futsu yo</i>, two joints of bamboo.</p>	<p>Y<sub>u</sub> へ 方 post-posit. To, towards, at, into; sign of the dative; <i>doko ye yuku</i>, where are you going; <i>Tōkyō ye itte ori</i>, am going to Tōkyō; <i>hon ye kakete</i>, write in a book; <i>chawan ye tsugu</i>, pour into a cup; <i>shita ye oriru</i>, to go downwards; <i>Tokuhama ye itabaku suru</i>, to arrive at Yokohama; <i>kami ye ochita</i>, fell into the river. Syn. xi.</p> <p>YEN = 円 n. A dollar, = 100 sen.</p> <p>Yo = 四 (cont. of yotsu) Four. Syn. shi.</p> <p>Yo = 餘 (amari) More than, beyond, above; upwards; other, the others; the residue, remainder; beside, surplus, superabundant; <i>nijū yo nin</i>, more than twenty men; <i>san yo nen</i>, upwards of a thousand years; — <i>no hito</i>, another or different person; <i>some yo</i>, besides that, moreover; <i>hyaku nin no yo</i>, more than a hundred men. Syn. hoka, ta.</p> <p>Yo = 節 n. The part of a bamboo between the joints; <i>take no yo</i>, a joint of bamboo; <i>futsu yo</i>, two joints.</p>

図3 日本式 (田中丸 (1914) より)

	ア	イ	ウ	エ	オ	拗音
	a	i	u	e	o	-ya -yu -yo -wa
k	カ	キ	ク	ケ	コ	キヤ キユ キヨ
ka	ki	ku	ke	ko		kya kyū kyō kwa
g	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ギヤ ギユ ギヨ
ga	gi	gu	ge	go		gya gyū gyō gwa
s	サ	シ	ス	セ	ソ	シヤ シユ シヨ
sa	si	su	se	so		sha syū syō —
z	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ジヤ ジユ ジヨ
za	zi	zu	ze	zo		zya zyū zyō —
t	タ	チ	ツ	テ	ト	チヤ チユ チヨ
ta	ti	tu	te	to		tya tyū tyō —
d	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	ヂヤ ヱユ ヱヨ
da	di	du	de	do		dya dyū dyō —
n	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ニヤ ニユ ニヨ
na	ni	nu	ne	no		nya nyū nyō —
h	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ヒヤ ヒユ ヒヨ
ha	hi	hu	he	ho		hya hyū hyō —
p	パ	ピ	プ	ペ	ポ	ピヤ ピユ ピヨ
pa	pi	pu	pe	po		pya pyū pyō —
b	バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ビヤ ビユ ビヨ
ba	bi	bu	be	bo		bya byū byō —
m	マ	ミ	ム	メ	モ	ミヤ ミユ ミヨ
ma	mi	mu	me	mo		mya myū myō —
y	ヤ	ユ	ウ	エ	オ	—
ya	(i) ya	(u) yo				—
r	ラ	リ	ル	レ	ロ	リヤ リユ リヨ
ra	ri	ru	re	ro		rya ryū ryō —
w	ワ	ウ	ウ	エ	オ	—
w	wa	wi	wo	wo		—

はねろ音には見ても使ふ例Anna, Kanban.  
 ㊦東字音には次に載る k e a p を二つ重ねて書く、例Sekkei, Rassya, Ityōmo, sappari.  
 引く音には a i u e o にへを付け、又は(特に大文字の時)母字を二つ重ねて書く、例 Kōbe, Oosaka, Tōkyō, TOKIO.

字協会に合わせるために採用した、旧ヘボン式そのものである可能性が高い。

以上をふまえると、「円」の明治初期のローマ字表記は、旧ヘボン式に由来するYENであったということが言える。では後の時代、明治の中期以降はどのような変遷を辿ったのだろうか。以下で述べてみることにする。

本稿は、村上道彦氏所有の切手コレクションを用いて「円」のローマ字表記の

変遷を考察する。6頁から7頁にある、図5を参照していただきたい。郵便切手を見ていくと、1888年、1899年にYENの簡略表記「y.n」が出現し、1908年からYENが登場している。1939年から1947年の間はENも使われていたことが見て取れる。そして1948年以降YENが再び用いられる。このことをまとめたのが図4である。

図4 切手の「円」のローマ字表記

第1期			第2期			第3期		
番号	西暦	円						
1	1888	y.n	15	1939	EN	32	1948	YEN
2	1899	y.n	16	1939	EN	33	1951	YEN
3	1908	YEN	17	1939	EN			
4	1908	YEN	18	1945	EN			
5	1913	YEN	19	1945	EN			
6	1914	YEN	20	1946	EN			
7	1914	YEN	21	1946	EN			
8	1914	YEN	22	1946	EN			
9	1924	YEN	23	1946	EN			
10	1924	YEN	24	1946	EN			
11	1930	YEN	25	1946	EN			
12	1937	YEN	26	1946	EN			
13	1937	YEN	27	1947	EN			
14	1937	YEN	28	1947	EN			
			29	1947	EN			
			30	1947	EN			
			31	1947	EN			

郵便切手の「円」表記の変遷は3期に分け考えることができる。第1期は1888年から1937年の「y.n」および「YEN」となっていた期間である。第2期は1939年から1947年の「EN」とある期間である。第3期は1948年から1951年の「YEN」となっている期間である。第1期にあたる期間において『和英語林集成』では/e/はEと表記する修正ヘボン式になっているにもかかわらず、第1期の切手においてはYENとなっており一致を見ない。第2期においては『和英語林集成』と切手における表記はENということで一致している。しかしながら、第3期ではYENが復活するという事になっている。

第3期においてYENとなっていることに注意したい。1945年にGHQによって修正ヘボン式に統一された後、1954年に内閣告示により現行のローマ字が定められたにもかかわらず、1948年からENではなくYENとなった。つまり、1945年以降は正しい表記であるENを差し置いてYENが復活したのである。なお、郵便切手がENであったのは第2期のみであり、YENとENが混在していた期間はない<sup>3</sup>。

YENは修正ヘボン式でも日本式でもない表記であるので、わざわざYENとす

る必要がないわけであるが、結果的にENからYENへと変化した。なぜこのような変化が生じたのだろうか。本稿では、英語話者を念頭に置いたためにYENと表記されたとの仮説を提示したい（より詳しくは後述）。この仮説によるならば、1948年以降のYENは、ヘボン式とは無関係に生じたということになる。

図5 村上道彦氏所有の切手コレクション整理したもの



①⑦ 1939



①⑧ 1945



①⑨ 1945



②① 1946



②① 1946



②② 1946



②③ 1946



②④ 1946



②⑤ 1946



②⑥ 1946



②⑦ 1947



②⑧ 1947



②⑨ 1947



③⑩ 1947



③① 1947



③② 1948



③③ 1951





### 3. TOKIO

YENと同じように内閣告示に従わない表記に、東京海上日動火災保険株式会社の「東京」に対応するローマ字表記がある。東京海上日動火災保険株式会社の「東京」に対応するローマ字表記はTOKYOとなるはずだが「TOKIO」となっている。この由来について、東京海上火災保険株式会社の歴史を記した、日本経営史研究所（編）『東京海上火災保険株式会社百年史 上』（東京海上火災保険、1979年）を以下に引用しよう。

イギリスとの実際の取引においては、イギリス人がTOKYOをTOKIOと発音するので、23年ころからTHE TOKIO MARINE INSURANCE CO. LIMITED あるいは TOKIO MARINE INSURANCE&CO. などの商号名も用いられた。（144頁）

このように、イギリス人の実際の発音に合わせてTOKIOを用いるようになった、と述べている。なお、明治25年の証券の表記においては現在とは異なり、英字表記はTHE TOKYO MARINE INSURANCE CO, LIMITED、ローマ字表記はTOKYO KAISYO HOKEN KABUSHIKI KAISHAとなっていることから、当時はまだ「TOKYO」も兼用していた。

上の引用にあることを和英語林集成の記述からも確認しておこう。旧ヘボン式での/kyo/のローマ字表記を確認するために、図6中の「恐怖」という語を見

図6 日英語林集成の/kyo/（『和英語林集成[A]～[K]第1巻』（港の人）より）

再 版	3 版
KYODOKU, キヨドク, 義徳, (J/summe) n. Treat- ment, behaviour, conduct.	KYODOKU キヨドク 義徳 n. (med.) TREAT- MENT.
KYODOKU, キヨドク, 義徳, (J/summe) n. Treat- ment, behaviour, conduct.	KYODOKU キヨドク 義徳 (summe) n. A false report, or report; a false account; also false medicine — 訛言, the report is quite true.
KYODOKU, キヨドク, 義徳, (J/summe) n. Treat- ment, behaviour, conduct.	KYODOKU キヨドク 義徳 (summe) n. Actions, behaviour, conduct, deportment. Syn. OKONAE.
KYODOKU, キヨドク, 義徳, (J/summe) n. Treat- ment, behaviour, conduct.	KYODOKU キヨドク 義徳 n. The ancient times of Chinese history.
KYODOKU, キヨドク, 義徳, (J/summe) n. Treat- ment, behaviour, conduct.	KYODOKU キヨドク 義徳 n. A church (building).
KYODOKU, キヨドク, 義徳, (J/summe) n. Treat- ment, behaviour, conduct.	KYODOKU キヨドク 義徳 Union: — 義, to unite.
KYODOKU, キヨドク, 義徳, (J/summe) n. Treat- ment, behaviour, conduct.	KYODOKU キヨドク 義徳 (white forbidden) Moral institutions: — 義, to teach; — 義, institute of morals: — 義, an interior mili- tary school.
KYODOKU, キヨドク, 義徳, (J/summe) n. Treat- ment, behaviour, conduct.	KYODOKU キヨドク 義徳 n. Fence, pass: — 義, to be afraid. Syn. OKU, OKU.
KYODOKU, キヨドク, 義徳, (J/summe) n. Treat- ment, behaviour, conduct.	KYODOKU キヨドク 義徳 n. (med.) Convul- sions; fits; 痲瘋, convulsions; mania/癲, chronic convulsions.
KYODOKU, キヨドク, 義徳, (J/summe) n. Treat- ment, behaviour, conduct.	KYODOKU キヨドク 義徳 (yayanyashika sume) Respectful congratulation.



てみると、そのローマ字表記は「KIYO-FU」となっている。この一方で、第3版の修正ヘボン式では「KYOFU」となっている。

以上のことから、アメリカ人であるヘボンは/kyo/をKIYOと表記したことがわかる。これは、英語話者にとっての「恐怖」の発音が日本人とは異なって認識されていたことによると思われる。現在でもドイツ語・イタリア語・スペイン語において「東京」はTOKIOと表記されることからすると、「東京」を TOKYO とすることは、欧米人にとって決して馴染みやすいものではなかったということが考えられる。明治期の東京海上火災保険株式会社はこの点に配慮してTOKIOを生み出した。日本人によるTOKIOは外国人への多分な配慮が認められるローマ字表記とすることができる。

#### 4. YENとTOKIOの共通点

先に見たように、1948年にはそれまでのENに代わってYENが採用されることとなった。ここでは、なぜYENが採用されることとなったのかについて考えてみたい。

常盤智子（2015）によれば、イギリス人の日本語研究者であったディキンズは歴史的な綴り方にはこだわらない実用的な音声を重視する立場から、19世紀後半に日本語のローマ字表記に関しさまざまな提案を行っている。その中の一つに、/e/をyeと綴るべきであるというものがある。ディキンズはこの根拠として、漢語の語頭に位置する/e/は[je]と聞こえるということあげる。これについては、ヘボンやチェンバレンにも類似の指摘がある（松村明 1970）。例えばale [eil]とyale [jeil]が別語であることからわかるように、英語に/e/と/je/の対立が認められることからすると、英語話者が[e]と[je]の違いに敏感であることはきわめて自然なことである。したがって、戦後の1948年当時（ないしは現在）の英語話者は、漢語の語頭の/e/をyeと表記することをすんなりと受け入れる感覚を持ち合わせているということが考えられてよい。

そうであるならば、日本人による「円」のローマ字表記YENは、TOKIOと同じく外国人への多分な配慮がある表記とすることができる。

## 5. NIPPON

ここまで内閣告示に従わない表記、YEN、TOKIOを取り上げてきたが、内閣告示に従っていても外国人への配慮が認められるローマ字表記が存在する。NIPPONがそれである。

言うまでもなく、「日本」は「ニホン」でもあり「ニッポン」でもある。東京の日本橋は「ニホンバシ」、大阪の日本橋は「ニッポンバシ」であり、「日本人」は「ニホンジン」であるし「ニッポンジン」でもある。しかしながら、国内で発行される紙幣、貨幣や郵便切手において「日本」がローマ字表記された場合、普通それはNIPPONとなる。このように、使用された状況を限ると、NIPPONの方ばかりが、あるいはNIHONの方ばかりが用いられるということが起こりうる。

試みに「日本」で始まる国内企業100社の社名を集め、「ニホン」と「ニッポン」がどのように使用されているかを調査してみよう。具体的な調査結果は次の通りである。

ID	企業名	日本語読み	アルファベット表記
1	日本政策金融公庫	ニッポン	JAPAN
2	日本無線	ニホン	JAPAN
3	日本風力開発	ニホン	JAPAN
4	日本電子材料	ニホン	JAPAN
5	日本抵抗器製作所	ニホン	JAPAN
6	日本通信	ニホン	JAPAN
7	日本超低温	ニホン	JAPAN
8	日本総合地所	ニホン	JAPAN
9	日本相互証券	ニホン	JAPAN
10	日本石油輸送	ニホン	JAPAN
11	日本製鋼所	ニホン	JAPAN
12	日本植物運輸	ニホン	JAPAN
13	日本証券代行	ニホン	JAPAN
14	日本証券金融	ニホン	JAPAN
15	日本出版貿易	ニホン	JAPAN
16	日本紙パルプ商事	ニホン	JAPAN
17	日本国土開発	ニホン	JAPAN

18	日本航空電子工業	ニホン	JAPAN
19	日本原子力発電	ニホン	JAPAN
20	日本金銭機械	ニホン	JAPAN
21	日本基礎技術	ニホン	JAPAN
22	日本駐車場開発	ニホン	NIPPON
23	日本テレビホールディングス	ニホン	NIPPON
24	日本端子	ニホン	NIPPON
25	日本生命保険	ニホン	NIPPON
26	日本伸銅	ニホン	NIPPON
27	日本上下水道設計	ニホン	NIPPON
28	日本商業開発	ニホン	NIPPON
29	日本工営	ニホン	NIPPON
30	日本空調サービス	ニホン	NIPPON
31	日本管財	ニホン	NIPPON
32	日本レヂボン	ニホン	NIPPON
33	日本和装ホールディングス	ニホン	NIHON
34	日本農薬	ニホン	NIHON
35	日本特殊塗料	ニホン	NIHON
36	日本電線工業	ニホン	NIHON
37	日本点眼薬研究所	ニホン	NIHON
38	日本調剤	ニホン	NIHON
39	日本製罐	ニホン	NIHON
40	日本製薬	ニホン	NIHON
41	日本製麻	ニホン	NIHON
42	日本精密	ニホン	NIHON
43	日本精鉱	ニホン	NIHON
44	日本盛	ニホン	NIHON
45	日本食品化工	ニホン	NIHON
46	日本食研	ニホン	NIHON
47	日本産業ホールディングズ	ニホン	NIHON
48	日本山村硝子	ニホン	NIHON
49	日本光電工業	ニホン	NIHON
50	日本研紙	ニホン	NIHON
51	日本建鐵	ニホン	NIHON
52	日本興業	ニホン	NIHON
53	日本化学産業	ニホン	NIHON
54	日本電波工業	ニホン	NIHON

55	日本ハム	ニッポン	NIPPON
56	日本増埒	ニッポン	NIPPON
57	日本郵便	ニッポン	NIPPON
58	日本冶金工業	ニッポン	NIPPON
59	日本配合飼料	ニッポン	NIPPON
60	日本道路	ニッポン	NIPPON
61	日本土建	ニッポン	NIPPON
62	日本電通	ニッポン	NIPPON
63	日本電設工業	ニッポン	NIPPON
64	日本電信電話	ニッポン	NIPPON
65	日本電気硝子	ニッポン	NIPPON
66	日本電気 (NEC)	ニッポン	NIPPON
67	日本甜菜製糖	ニッポン	NIPPON
68	日本通運	ニッポン	NIPPON
69	日本臓器製薬	ニッポン	NIPPON
70	日本精蠟	ニッポン	NIPPON
71	日本精練	ニッポン	NIPPON
72	日本精機	ニッポン	NIPPON
73	日本精化	ニッポン	NIPPON
74	日本清酒	ニッポン	NIPPON
75	日本水産	ニッポン	NIPPON
76	日本新薬	ニッポン	NIPPON
77	日本信号	ニッポン	NIPPON
78	日本触媒	ニッポン	NIPPON
79	日本色材工業研究所	ニッポン	NIPPON
80	日本車輛製造	ニッポン	NIPPON
81	日本梱包運輸倉庫	ニッポン	NIPPON
82	日本合成化学工業	ニッポン	NIPPON
83	日本高周波銅業	ニッポン	NIPPON
84	日本高周波	ニッポン	NIPPON
85	日本高圧電気	ニッポン	NIPPON
86	日本金属	ニッポン	NIPPON
87	日本海運	ニッポン	NIPPON
88	日本科学冶金	ニッポン	NIPPON
89	日本化薬	ニッポン	NIPPON
90	日本化学工業	ニッポン	NIPPON
91	日本液炭	ニッポン	NIPPON

92	日本乾溜工業	ニッポン	NIPPON
93	日本毛織	ニッポン	NIKKE
94	日本特殊陶業	ニッポン	NTK
95	日本製粉	ニッポン	NIPPN
96	日本農産工業	ニホン	NOSAN
97	日本電産	ニホン	NIDEC
98	日本写真印刷	ニホン	NISSHA
99	日本精工	ニホン・ニッポン併用	NSK

以上の結果において、まず日本語読みに着目すると、「ニホン～」が57社、「ニッポン～」が43社ということで、やや「ニホン～」とする企業が多いものの、この点に大きな差は無い。これに対し、社名のアルファベット表記に注目すると、NIHONは22社であるのに対して、NIPPONは49社となり、倍以上の差が生まれている。これは、「ニホン～」とあるにもかかわらず「NIHON～」としない企業があるためである。例えば、22の日本駐車場開発株式会社や23の日本テレビホールディングスの日本語読みは「ニホン」であるがアルファベット表記では「NIPPON」となっている。

「ニホン」を「NIHON」、「ニッポン」を「NIPPON」とすることについては説明を要しない。また、「ニホン」「ニッポン」にかかわらず、それをローマ字ではなく英訳にした「JAPAN」とすることにも納得がいく。しかし、日本語読みが「ニホン」であるのに、アルファベット表記において「NIPPON」とすることについては、これに疑問を感じないわけにはいかない。

一方、日本語読みが「ニッポン」であり、アルファベット表記が「NIHON」となっている企業があるかどうかということに注意してみよう。このようなケースは一つもなく、このことをふまえると、NIHONとNIPPONは対等の関係にあるわけではないと考えられる。すなわち、NIPPONは、NIHONよりも外国人により配慮したローマ字表記なのではないかということが想定されるのである。

上に述べたこととは反対のことが観察されたりもする。外国人による日本語弁論大会（一般財団法人 国際教育振興会 主催）における現象を取り上げてみよう。外国人の弁論において「ニホン」と「ニッポン」の使用を調査すると、明らかな差が認められる。「第54回外国人による日本語弁論大会（2013年度）」では、すべての弁論者が「日本」という単語を「ニホン」と発音している（発表者はアメリ

カ人2名、台湾人・ミャンマー人・バレー人・韓国人・ロシア人・マレーシア人・トルコ人・インドネシア人・ブラジル人・中国人それぞれ1名に及ぶ)。「ニッポン」が一度も使われることがなく、「ニホン」で統一されるという結果となっている。この点に外国人の「ニッポン」に対する理解が顕著に表れているように思われる。すなわち、外国人にとって「日本」は「ニッポン」ではなく「ニホン」であるべきであり、こうすることがより日本人らしさを特徴づけることにつながると理解されているように思われる。このために、日本に高い関心を寄せ、日本語を話すのをきわめようとする外国人は、日本人らしく振る舞いそして話すために、そろって「ニホン」を使用していたのである。ちなみに、アメリカで出版されている百科事典 (THE AMERICAN HERITAGE DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE:AMERICAN) を紐解くと、NIHONは'The official Japanese name for Japan'と記されているのに対し、NIPPONは単に'A Japanese name for Japan'とされている。

## 6. おわりに

以上、本稿は、YEN、TOKIO、NIPPONについて考察を加えてきた。これらの三語に共通するのは、日本人が外国人（なかでも欧米人、さらに言えば英語話者）に配慮したローマ字表記であるということである。では、日本人がどのように配慮したかといえば、もちろん、客観的な音声を聞き取る際の、彼らの聞こえ方のバイアスに配慮したということになる。このとき、守るべき内閣告示に示されたあり方から離れたとしても配慮が行われるということであるから、この配慮のモチベーションはきわめて強いものであると考えられよう。いわば日本人の「おもてなし」と言うことができようが、日本の通貨名、首都名、国名に「配慮」が認められるということは決して偶然ではないように思われる。

## 注

- 1 YEBISU に関しては、ブランド名を付けた明治期に旧ヘボン式を用いたために、それが今でも使い続けていると考えられる。なお、片仮名表記では「エビス」となり、ワ行の「エ」が使われていることに違和を感じるかもしれない。しかし、ヘボン式は/e/にYEが対応するとし、ア行・ヤ行・ワ行の区別はしていない。「エビス」とあることは、このように説明されるのである。
- 2 この協議の際に「羅馬字ニテ日本語ノ書き方」をヘボンに薦め全面的に採用されこ

とで、ヘボン式の名のもとに羅馬字会は名を広めた。

- 3 郵便切手の「円」のローマ字表記について言及した先行研究に蜂矢真郷（2006）がある。該当する箇所を引用しておく。

郵便切手は、EN とあるものも YEN とあるものもあった。戦後のものでいうと、1946 年～47 年の、第 1 次昭和切手と呼ばれるものの、葛飾北斎「山下白雨」を画いた「壹圓」切手などに EN とあり、1946 年～48 年の第 2 次新昭和切手と呼ばれるものの、横長の螺鈿模様を画いた「拾圓」切手などに EN とある。他方、1948 年の第 3 次新昭和切手と呼ばれるものの、縦長の螺鈿模様を画いた「拾円」切手に YEN とあるがその後に「円」のローマ字表記は見えない。（223 頁）

## 使用文献

- 飛田良文（2000）『和英語林集成[A]～[K]第1巻』港の人、（2000）『和英語林集成[M]～[Z]第2巻』、（2001）『和英語林集成[A]～[Z]解説第3巻』  
 沼田次郎・松村明・佐藤昌介（1976）『洋学 日本思想大系』岩波書店  
 一般財団法人 国際教育振興会 〈<http://www.iec-nichibei.or.jp/outline.html>〉  
 日本郵便切手商協同組合（編）（2013）『日本切手カタログ』日本郵便切手商協同組合

## 参考文献

- 菊池悟（2007）「ローマ字論争—日本式・標準式の対立と消長」『国語論集13 昭和前期日本語の問題点』 pp. 66-84、明治書院  
 高島俊男（2001）『漢字と日本人』文芸春秋  
 田中丸卓郎（1914）『ローマ字國字論』岩波書店  
 常盤智子（2015）『英学会話書の研究』武蔵野書院  
 中川かず子（1998）「ローマ字と日本の近代化」『北海学園大学人文論集』10号、pp. 135-166.  
 蜂矢真郷（2006）「促音・撥音の現代ローマ字表記」『国語文字史の研究』9、pp. 221-236、和泉書院  
 松村明（1970）『洋学資料と近代日本語の研究』東京堂出版

（むらかみ・あおい 本学卒業生 たけうち・しろう 成城大学准教授）